

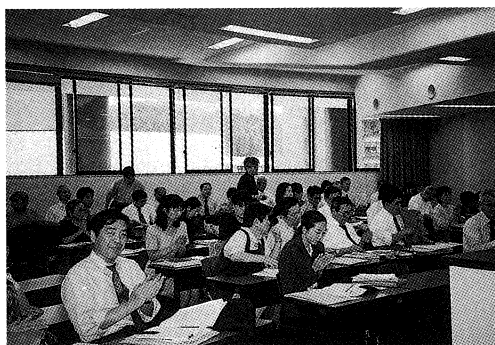
(一) 全国大学史資料協議会

一九九九年年度総会ならびに全国研究会

全国大学史資料協議会一九九九年年度総会ならびに全国研究会は一九九九年九月二十日から二十二日までの三日間、金沢大学で開催された。今回は会期中ずつと雨というあいにくの天候であったが、東西あわせて三八大学五六名、個人会員八名の計六四名の参加をみた。

初日は、総会に先立って東西合同の役員会が開かれ、総会に諮られる事項の確認が行なわれた。総会は三時から金沢大学角間キャンパス教育学部棟三〇二号室で開かれた。まず協議会会長校・桃山学院年史委員会の西口 忠氏の開会挨拶があり、次に会場提供校・金沢大学五〇年史委員会委員長の橋本哲哉先生の挨拶があった。続いて、議長、副議長に選出された明治大学歴史編纂事務室の鈴木秀幸氏、福岡大学大学史資料室の藤本俊史氏によって総会が進められた。まず東日本部会副会長校・東海大学資料室の大森悦郎氏から役員会審議事項二点―ケニス・スミス氏講演録の作成と今年度の分科会報告冊子の作成について―が報告され、承認された。次に本年度の活動計画を東西それぞれの庶務校が報告し、総会は閉会した。

引き続き講演会に移った。金沢大学教育学部教授・五〇年史編纂委員の江森一郎先生に「金沢大学五〇年史の編纂について」と題してご講演いただいた。先生は一九九六年の全国大学史資料協議会設立総会の時に事務官と二人でオブザーバーとして参加されたことがあり、その時に歴史を編纂するということがいかに大変なことであるかを知ったとおっしゃり、記念事業の一環として



#### 講演会場

の五〇年史作りの実状について話して下さった。金沢大学では一〇年史はあるがその後年史は出されておらず、五〇年史を作るための編纂室ができるまでが「苦勞」であると考えて仕事をしてきた。業務内容については実務担当者方をお願いしている。前史も詳しく入れ、写真、コラムのある読みやすいものを作りたい。データはコンピュータで管理しているとの由。大学史の仕事を始めてから「大学」の性格―言葉の意味も含めて、「大学」というものの考え方を考えるようになったと、話を締めくくられた。

講演会終了後、場所をキャンパス内の食堂に移して研修懇親会がもたれた。開会挨拶が終わるとすぐに情報交換、挨拶の輪ができ、あちらこちらから笑い声に混じって意見交換の真剣な話し声が聞こえてきたりと、約二時間があつという間に過ぎ去った。毎年担当者の交替があり、今年度も何校かの担当者が替わっていたが、懇親会の活況はいつも変わらない。

二日目は金沢大学附属図書館三階A V ルームに集合し、金沢大学附属図書館専門員で五〇年史通史を執筆なさった梶井重明氏から「金沢大学附属図書館所蔵の貴重資料について」を伺った。スライド、ビデオを用いて蔵書がどのように伝えられてきたかを説明された。蔵書の中には古い和綴の本があり、その修復の様子がビデオに記録されていた。簡単な質疑応答のあと昼食をはさんで、梶井氏、図書館資料サービス課長の小川恭弘氏、金沢大学資料館学芸員の在田則子氏の案内・解説で図書館と資料館を見学した。図書館は一階から地下一階まで出入自由、貸出可能な書庫になっており、二階にはこれらの資料のほかに大学関係の資料やEC(European Community)資料(金沢大学を含めて全国二〇か所にこの資料があるとのこと)がある。資料については現在データベース化を進行中で、データベース化と共に資料の利用も増加しているとのことであった。資料館は図書館二階の一角にあり、金沢大学五〇周年記念展示「蔵書展 金沢大学の源流」が開催されていた。

見学終了後、前日の部屋に戻って分科会の発題があり、三分科会に分かれて討論を行なった。発題は中央大学大学史編纂課の松崎 彰氏。昨年度協議会では、初めて分科会

による討論を試みた。三つのテーマに分けて行なったところ、第二分科会が討論にまで発展できずに多くの課題を次年度に持ち越すことになった。そこで今年度は第二分科会での課題の中から「史資料」に着目して三つのテーマを選び、分科会のテーマとした。

第一分科会は、「資料の調査・収集をめぐる諸問題」で、問題提起は、明治大学の鈴木氏、司会は関西学院学院史資料室の池田裕子氏。第二分科会は「資料整理とコンピュータ利用の可能性をめぐる諸問題」で、問題提起は関西大学出版部出版課の福井智佳子氏、司会は東海大学資料室の馬場弘臣氏。第三分科会は「組織的な資料保存の体制に関する諸問題」で、問題提起は大阪商業大学谷岡記念館事務室の福本智安氏、司会は学習院大学史料館の桑尾光太郎氏。三つに分かれて討論したあと、それぞれの司会者から各分科会討議内容の報告があった。

第一分科会では問題提起を行なった鈴木氏のレポートに沿って話が進められた。全体の報告会ではまずこのレポートがすばらしかったことが紹介された。資料の収集は史実を明確化するために今何をなすべきかを踏まえて行なうべきであり、資料はいっ、誰が扱ってもわかるようにしておくという意識をもって収集、運用しなければならない。今後は共同作業が必要となってくるため、情報交換、協力体制を構築し、地道な作業を続けるために足と頭を鍛える必要がある。以上のような資料を扱う者の基本姿勢が確認された分科会であった。

第二分科会では一九九九年六月にとられたアンケートの結果報告を受けて、各大学の傾向とコンピュータ化についての問題点が話し合われた。学内他部署との協力体制(学内LANなど)の必要からコンピュータを導入した学校もあり、各校とも問題意識は高いが、担当者のコンピュータに関する知識等の問題があり、各校間の格差の拡大が懸念される。導入するための基本的な考え方としては、資料の収集とデータベース化の目的を明確にすること、問題はどんなコンピュータ・ソフトを使用するかではなくデータとして必要なものは何かを選別することである。そのためにデータはなるべくシンプルな方がいいという意見が出た。今後はアーキヴィストとコンピュータとの関係、つまりそれぞれの役割を明確にする必要がある。このテーマはこれから一層情報交換と検討を重ねてゆかねばならない。

第三分科会では資料保存について討議したが、まず問題になるのは資料の受け入れについてである。資史料室の位置づけは保存

規定の有無、学内での認知度などによって各校の事情は異なるが、資料の受け入れは規定どおりにいかないことが多い。アーキヴィストの独自性が必要になるであろう。間口が広い方がいいので、文書以外の資料もとりあえず受け入れた方がよいのではないかと意見も出た。資料の利用、情報公開の問題が今後の検討課題となるが、機能面から同種の施設である博物館との関係を明確にする必要がある。

今年度の分科会の成果は、総会で承認されたように、討議内容にアンケート結果を含めて報告書として冊子にまとめられることになった。分科会の終了をもって協議会全国研究会は閉会した。

三日目は見学会が行なわれた。石川近代文学館、金沢市立ふるさと偉人館、石川県立歴史博物館の三館を順に回った。各館、まず担当の方の簡単な説明を受けたあと、自由に見学した。

今回の全国研究会では昨年度に続いて分科会が行なわれた。初めての試みということもあって未消化であった昨年度に比べて、今年度はテーマをしばらくのこと、また問題提起を行なった方々の周到な準備のおかげで、充実した内容の分科会を持つことができた。改めて、明治大学の鈴木氏、関西大学の福井氏、大阪商業大学の福本氏に御礼申し上げる。また、会場校・金沢大学五〇年史編集室の谷本宗生氏をはじめ、役員校の皆様にも感謝申し上げる。

今回の全国総会では関西学院と共に神戸女学院が会場校となることが決まった。二〇〇〇年に創立一二五周年を迎える本学にとってはまたとない機会である。全国大学史資料協議会の更なる発展と共に神戸女学院の記念すべき年が充実したものとなることを祈りながら、神戸での皆様との再会を楽しみにしている。